

ゴランの屋敷やしきにラックが住み始め、まだ眠りについていた頃。

セルリスはラックのことを父の隠し子だと誤解ごかいしていた。

ラックが目覚める前日、セルリスは意を決して隣国に単身赴任たんしんふにんちゆう中の母に手紙を書きはじめた。

「えっと、書かないといけないのは、パパが怪あやしいってことよね……とはいえ、直接的なことを書くのもよくないわよね」

物的証拠ぶつてきしやうこはまだない。限りなく黒に近いが、まだ灰色なのだ。

『母上。私は不安に思うことがあります。それは父上が

怪しいということなのです』

そこまで書いて、セルリスは不安になった。

「これだけだと、何が怪しいかわからないわね。でも隠し子って書くのは直接的すぎるわ」

しばらく悩んだ後、セルリスは筆をとる。

『というのも、父上は若い男を屋敷に連れ込んでいます。しかもただならぬ、とても私の口からは言えないような関係の様子なのです』

書き上げた後、セルリスはもう一度自分の書いた文章を読み返す。

非の打ち所のない完璧かんぺきで、上品な文章である。そうセルリスは思った。

「これでいいわ！ 直接的ではないマイルドな表現といえるわね！」

その後しつかりと封ふうをして、セルリスは母に手紙を送った。

その後、色々あつてラックがゴランの隠し子ではないとセルリスは知った。

「は、母上の誤解を解とかないとー！ でもロックさんがラックさんだと報しらせるのはよくないわよね」

セルリスの出す手紙は普通の手段で届けられる。どこかで盗ぬすまれたりするかもしれない。

機密情報を届けるときは暗号を使ったり専用の魔道具

を使うのが常識だ。

『母上。先日お送りした手紙は誤解でした。ここには書けません。特別に親密なだけだったようです』

「これでラックさんがパパの隠し子だという疑うたがいはとけるわね！」

読み返してみてもセルリスは満足する。

「あ、そうだわ！ エリックおじさまとも仲がいいぐらいのことは書いてもいいわよね」

『そのお客様は国王陛下こくおうへいかとも仲がよいご様子。父上と陛下はおお客様と大変仲がよく、とても親密なご様子です』

「これでよしっ。これでママも安心するわー！」

しばらく経って隣国のセルリスの母は、その手紙を受け取り混乱した。

「……どういふことかしら？　まあ、陛下に聞けばいいわね」

セルリスの母は魔道具を使ってエリックに通話を繋つなげる。

「ちよつと、陛下。どういふこと？　ゴランが何か若い男を連れ込んでいるとか？」

「ああ、その話か。それはだな」

セルリスの母はエリックの説明で事態を完璧に理解することができたのだった。